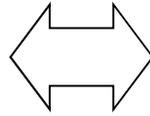


カワウの個体群管理についての課題について

1. 管理しやすいねぐらやコロニーの個体数について

小さなねぐらをたたいて、大きなねぐらやコロニーを残して管理した方が良い

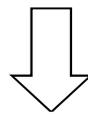


大きなコロニーをたたいて、小さなねぐらやコロニーを残して管理した方が良い

< 主な意見 >

- ・ 調査コストが増える
- ・ 被害地とねぐらの関係が不明確になる
- ・ 被害地とねぐらの距離が近くなり、被害が増加する
- ・ 個体数が増加する？

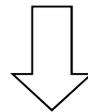
意見の不一致？



個体数のスケールに対する意識のずれが原因

< 主な意見 >

- ・ カワウの個体数が 1 万羽以上になると、防除対策や植生管理の効果があがらない。
- ・ 1 万羽を超えるカワウによる漁業被害の場合、カワウの個体数が被害量に直結する



経験上、100 羽 ~ 3000 羽ぐらいのねぐらやコロニーが管理しやすいのではないかと？

2. 漁業被害と森林被害（景観被害等含むねぐら・コロニーでの被害）どちらを優先するか？

- ・ 漁業被害はねぐらではなく採餌場で発生する。
- ・ 森林被害の場合は、問題を起こしているねぐらやコロニーそのものを除去するか、ゾーニング管理で被害をより短期間で削減することができる。

ねぐらやコロニーでの被害を優先して対処する

注意点：対策の実施がねぐらの分散、そして漁業被害の拡大を招く恐れあり

そのために

ねぐらやコロニーでは

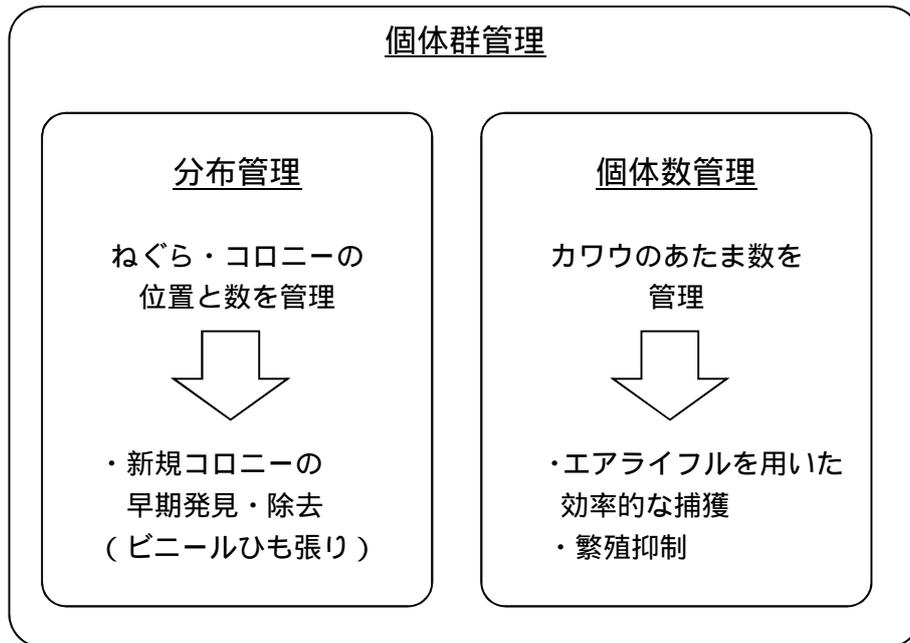
- ・ 分散に留意した対策の実施
- ・ 分散に備えた周辺関係者への周知

周辺域では

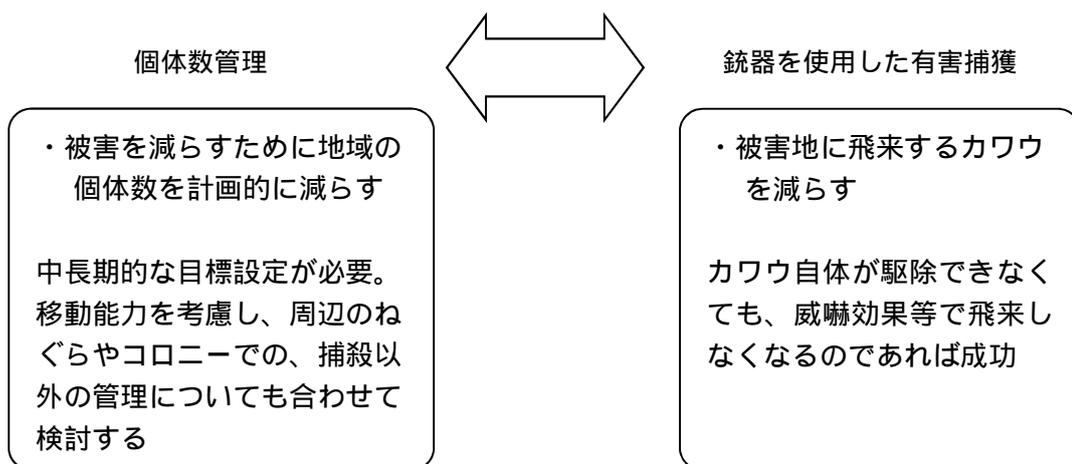
- ・ 新規ねぐらの早期発見（モニタリング・情報収集）
- ・ 発見した際は早期対策

3 . 個体群管理の考え方の整理

- ・都道府県状況、個々のねぐらやコロニーの状況により、どのような手法で管理していくのが良いかが異なる。
- ・個体群管理のなかに、分布管理や個体数管理が含まれる。
- ・カワウの保護管理は、個体群管理だけで行うものではなく、被害防除対策と生息環境管理を合わせた3本柱の対策を総合的に実施していくことが望ましい。



4 . 個体数管理と銃器を使用した有害捕獲との区別



5 . 個体数管理の技術的側面

どこでなら実施可能なのか？どこでなら高い効果が見込めるのか？

(1) 繁殖抑制

条件：

- ・ 1 シーズンの営巣数が 500 巣未満である。
- ・ コロニーに人が立ち入ることができる。
- ・ 営巣木の樹高が 12m 未満である。
- ・ **実施体制**を作れる。

実施体制

複数年の対策予算
複数年の対策を実施できる技術と体制
巣単位でのモニタリングを継続する技術と体制
新型コロナの早期発見および除去の技術と体制

(2) 専門の技術者による高度な捕獲

条件：

- ・ 抱卵・抱雛しているカワウの巣に 100m まであまり警戒されずに近づける
- ・ 発砲方向に人家等がない。
- ・ 個体数が多い。
- ・ **実施体制**を作れる。

実施体制

訓練された少数精鋭の従事者
計画的で統制のとれたチーム体制
精密狙撃技術・ストーキング技術
適切な判断力と強い精神力
科学性の保持